

令和元年6月21日現在

機関番号：32406

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770122

研究課題名(和文)近代フランスにおける「公」と「私」の空間：文学、美術、建築の創造的発展

研究課題名(英文)"Public" and "private" spaces in Modern France. -- Creative development of literature, fine art and architecture

研究代表者

福田 美雪(寺嶋美雪)(FUKUDA, MIYUKI)

獨協大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90632737

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀フランスを通じて、「公」と「私」の空間が、産業的な都市空間と、快適な家庭空間という対照的な2種に分かれて発展したことを問題にした。文学作品や美術作品において、これらの空間が表象される時、つねに問題となるのは、個人や親しい家族などの「親密さ」という視覚化できない関係性を、どのように表現するかが共通の関心となっていることが明らかになった。文学・美術、あるいは建築におけるロマン主義、写実主義、自然主義、象徴主義などの美学は、「親密さ」という19世紀的な新たな概念を追求したという点で、共通点があるということが発見できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、文学、美術、建築という異なるジャンルにおける「公」と「私」を表裏一体のものと捉え、その表象史を考察することで、社会史・美術史・文化史における領域横断的な研究の可能性を示した。とくに、19世紀の政治体制における都市構想や、近代市民社会を構築した思想と、1世紀以上にわたる各芸術流派の美学に、「親密性(アンティミテ)」という共通のキーワードが認められることを論証した点で、19世紀から現代にいたるまで、いかにして「親密性」の表現は変遷していくか、という新たな問題も発見できた。

研究成果の概要(英文)：This study held as a focal point the fact that, throughout the 19th century France, "public" spaces have developed as industrialized urban spaces, while "private" spaces as comfortable domestic spaces, in sharp contrast.

It has been revealed that, everytime those spaces were expressed in literature works or fine arts, how the "intimacy" of persons or family members whose relativity cannot be visualized, were described the common point of interest.

It was discovered that the aesthetics like romanticism, realism, naturalism, symbolism have a common point that they pursued the "intimacy", a new concept in 19th century.

研究分野：フランス文学

キーワード：親密性(アンティミテ) 近代フランス文学 近代フランス美術 近代フランス建築 絵画 写真 自然主義 エミール・ゾラ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、過去の科研費での個人研究を遂行する過程で着想された。これまでは、フランスにおいて、自己と近い他者との関係から営まれる「親密な私生活(アンティミテ)」をキーワードに、ロマン主義から自然主義に至る文学作品、そしてロココ美術から印象派までの絵画を中心に研究してきた。その結果、「親密な私生活」の充実には、ブルジョワ階級の台頭、首都パリの近代化、公共生活の発展という背景があり、近代フランス社会の形成過程のあらゆる局面で「公共生活」と「私生活」の線引きが意識されたことが明らかになった。

とくに七月王政期(1830-48)～第二帝政期(1852-70)の芸術家たちは、「親密な生活」をひとつの社会的な営みと捉え、室内と外界の対立、内と外の往来をきわめて視覚的に描いた。「公」と「私」の領域は互いに補完するものであり、18世紀末～19世紀半ばまでの芸術作品にも多様な形で反映されている。あらゆる日常的営みにかかわる「親密な私生活」をキーワードに、絵画と文学の相互的発展の軌跡が照らし出されることがわかった。

「公」と「私」、「外」と「内」が、近代フランスの都市計画において一体化したものと意識され、都市整備や市民生活の発展はどちらを欠いても不可能であったことを踏まえた研究はほとんどなかった。しかし、モニュメントや広場、大通りの建設へと邁進した公共工事と、親密で快適な空間を追究した私的建築は、正反対の方向を向いているようで、安定した社会秩序の表現という次元においては一致している。本研究では、「公共空間」のみを描いた画家や文学者はほとんど存在せず、逆もまた然りであったこと、つまり芸術における都市表象において、「公」と「私」は表裏一体と認識されていた点に着目した。

2. 研究の目的

現在我々が知る首都パリは、革命後に基盤がつくられ、19世紀の前半に整備が進み、オスマンのパリ大改造によってほぼ完成したものである。本研究では、この時期に創造された都市風景や私生活風景を描いた芸術作品を、パリの地政学と結びつけて再解釈し、作品の時代背景を比較しながら、新たな「近代パリの表象史」の構築を目指した。

まず、近代パリの「公共空間」がどのように発展したのか、その歴史的背景を踏まえ、公共工事によって生まれた市街区ごとの特色・位置づけを整理しつつ、芸術作品に描かれるモニュメントや大通り、公園、広場、橋などの機能と役割を考察する。

次に、近代パリの「私的空間」という概念、とくに建築スタイルの変遷や、文学・絵画が描く快適さの重視、室内装飾の洗練、私空間の分離と配置などの表現を分析する。

さらに、都市改造によって創出された「公」と「私」の性格を併せもつ空間の重要性に注目し、サロン、カフェ、劇場、裏社交界など、「内」と「外」が交錯する文化的領域を考察する。共同体の感性に大きな影響を与えた首都パリの独自性、機能美と芸術性の両立、文化的な重層性を伝える資料を調査し、歴史と文化の交錯する「近代パリ」の創造的発展を総覧することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、ブルジョワ階級と資本主義経済を中心に発展した近代パリの多様な空間表象を、「公共空間」と「私的空間」という二つの軸の対立と交錯という観点から考察した。研究期間の前半では、18世紀末～19世紀前半の風俗小説や風俗画を手がかりに、とくに第二帝政期のパリ大改造前後で社会に生じた美意識の変化、芸術家によるパリ表象の新たな展開に着目した。研究期間の後半では特に「現代性(モデルニテ)」の出発点となる、オスマンのパリ大改造に焦点を絞り、街並みと住居の変化が芸術潮流に与えた決定的影響を分析した。革命から第二帝政期までに創出された、「内」と「外」が連結するパリ風景を描写した文学者や画家たちは、どのように個の感性から普遍的記憶へと開かれた時代のパノラマを創造したのかを考察した。

申請者の専門である、19世紀フランスの文学者、バルザック、ユゴー、ゴーチエ、ボードレール、フローベール、ゴンクール兄弟、ゾラら、すぐれた都市風俗の観察家であった作家のテクストから見える、「公」と「私」の空間のとらえ方を比較し、共通点と差異を明確にすることを目指した。いずれの作家も美術と深くかわり、ドラクロワ、クールベ、マネ、モネ、ドガ、ルノワールらパリ風俗を描いた画家たちと影響を与え合う関係にあったことにも着目した。

具体的にはメルシエの『タブロー・ド・パリ』(1781)、バルザックの『人間喜劇』連作、ユゴーの『レ・ミゼラブル』(1862)、フローベールの『感情教育』(1869)など、1848年の二月革命までのパリを表象した文学者の視点や問題意識を通して、首都の「地政学」を整理した。

また、革命後の公共工事やインフラ整備によって意識されることとなった、「公私の領域」とくに家庭の営みを中心とする「私的な生活」の表現スタイルを調べた。「親密さ(アンティミテ)」の概念の発展を探るため、当時の建築図面などの資料と芸術作品による表象を比較した。

とくに、本計画の中核となる「公」と「私」の交錯する空間(サロン、カフェなど)の文化的役割、その芸術的表象を整理した。とくに着目したのは、エミール・ゾラ(1840-1902)の、『ルーゴン・マッカール叢書』(1871-93)である。この連作には、都市改造によって創出され

た「公」と「私」の性格を併せもつ空間、たとえばサロン、カフェ、劇場の栈敷や楽屋、レストランの個室など、社交界と裏社交界が交錯する特殊な空間が頻出する。ゾラはオスマンの創造した近代都市を高く評価し、積極的に作品にとりこんだ。2013年にフランス国立科学研究所のゾラ・チームが完成させた、ゾラに関するアーカイブスや先行研究、図版を含む無料サイト Archi-Z を活用し、研究を効率よく進めることができた。

オスマン以後の都市空間が、公私にわたって、安定した社会秩序を表現したにもかかわらず、そうした価値観をかく乱し転倒する領域こそ、芸術家たちを惹きつけたことに注目し、文学においてはゴンクール兄弟、ゾラやモーパッサンなど自然主義の世代、絵画においては、クールベやマネ、カイユボット、ドガなど、大改造が生んだ景観美だけではなく、その矛盾や暗部に近代美を見出した芸術家の作品に注目し、研究を総括した。

4. 研究成果

本研究は、芸術家の個人的な感性と、共同体の感覚の結びつきを通して、「個」から「普遍」へとひらかれた、パリという都市の表象史をまとめる試みであった。「公」と「私」の対立と相互的發展というテーマは、同時代の風俗を活写した近代フランス芸術に遍しながら、コーパスの広さゆえ総合的に論じられずにいた。しかし本研究は、「私的空間」と「公共空間」という対の軸を立て、線引きを意識された「公」と「私」の領域は、どこで交錯し発展したか、どのような現象を都市生活にもたらしたかという新たな問いを設定した。そして、時代のコンテクストから生まれ、同時代に広く受容された象徴的な文学や絵画作品を再解釈することで、近代パリの都市風景を建築・社会活動・芸術文化の面から総体的に捉え直せることを示した。

「公」と「私」の観念は、18世紀末～19世紀半ばに限っても、時代背景や社会的文脈によって様相を変えており、芸術家たちによる捉え方も異なる。この差異を比較することで、様々な問いに答えることが可能である。たとえば、伝統的には下位ジャンルだった風景画や風俗画はなぜ近代パリで市民権を得たのか、それらの絵画の革新性をなぜ文学者たちは見出すことができたのか、19世紀文学に都市風景や私的空間の描写が頻出するのはなぜか、カフェやサロン、劇場などの描写にはどんな含意があるのか、オスマン大改造の前後ではパリ表象にどのような変化が現れたか、などである。文学や絵画を入り口とすることによって、芸術家たちの潜在的な繋がり、ひいては通史とテーマ史の交錯するパノラミックな文化史を浮き彫りにすることができた。今後は、フランス社会史、美術史、建築史、あるいは比較文化の分野の研究者と共同し、歴史・文化・社会を横断的にとらえ、絵画や文学を広い視野から読み直す「近代パリの表象史」をさらに緻密に整理していく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

(1) 福田美雪「第三共和政の危機 — エミール・ゾラのパンテオン葬」、『フランス文化研究』第49号、獨協大学、2018年、pp. 99-123.

(2) 福田美雪「開かれたパンテオン — 『プレイヤード叢書』をめぐって」、『文学』第17巻第5号、岩波書店、2016年、pp. 59-73.

(3) 福田美雪「19世紀小説に描かれるオペラ座の観劇風景 — バルザックからゾラまで」、『フランス文化研究』第46号、獨協大学、2015年、pp. 121-147.

〔学会発表〕(計 4 件)

(1) 福田美雪「『制作』をめぐるゾラとセザンヌ — 自伝かモデル小説か」(招待講演) 新潟大学フランス学研究会、新潟大学、2017年11月21日

(2) 福田美雪「フランス文学のカノンの形成」(招待講演) 世界文学研究会、岩波書店、2015年8月2日

(3) 福田美雪「時代を予見する文学者、エミール・ゾラ」(招待講演) 人文社会系セミナー、日仏会館、2015年7月5日

(4) 福田美雪「パリ・オペラ座を描く文学者 — エミール・ゾラの場合」ワークショップ「近代フランス文学におけるモニュメント — 記憶、複製、再創造」日本フランス語フランス文学会2014年度秋季大会、広島大学、2014年10月26日

〔図書〕(計 3 件)

(1) 福田美雪「小説家の暗室 — 19 世紀のアルバムとテキスト」、『<見える>を問い直す— アート、イメージ、テキスト』、柿田秀樹、若森榮樹編、彩流社、2017 年、289p. (pp. 213-226.)

(2) 福田美雪「君の削除箇所を読み — 小説家ゾラの準備ノート」、『芸術におけるリライト』、白百合大学アウリオン叢書 16 巻、2016 年、213p. (pp. 187-200.)

(3) 福田美雪「フランスの絵画」、『教養のフランス近現代史』、竹中幸史・杉本淑彦編、ミネルヴァ書房、2015 年、370p. (pp. 119-137.)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。